

【論文】

ニーチェから日蓮へ〈樗牛の場合〉
—後編—

中村 憲治

Von Nietzsche zu Nichiren (Bei Chogyu)

Kenji Nakamura

高山樗牛は、その生涯において思想的な移行を繰り返した人であった。そしてその最後の移行が「ニーチェから日蓮へ」であった。樗牛はニーチェに強く惹かれた。思想に惹かれただけではない。人間ニーチェに最も強く惹かれたのである。樗牛はニーチェに「文学者の崇高偉大な天職」の自覚を觀た。そして自らも文学者の崇高偉大な天職の自覚を持ったのではないだろうか。そしてその自覚が日蓮へと傾斜させたのではあるまいか。樗牛は日蓮により強い自覚を、より大きな信念を觀たのだと思う。そしてそれを觀ることが出来たのは、樗牛自身がその自覚を持つことによって内的に変化した、すなわち拓かれたからだ、私は思うのである。

キーワード：ニーチェ、日蓮、樗牛、現世肯定、個人主義

(ニーチェ主義時代)

1. 樗牛は何を読んだのか

樗牛はニーチェに「先天の契合」を感じ、ニーチェにのめり込んでいった。明治三十四年一月に『太陽』に発表した「文明批評家としての文学者」に始まり、「姉崎嘲風に与ふる書」(五月)、「ニイチェの批難者」「ニイチェの嘆美者」(十一月)、「三十四年の文芸界」(三十五年一月)、「無題録」(四月)、「感慨一束」(八月)等、かなりの著作の中でニーチェに触れ

ている。所で樗牛はニーチェの著作の中の何を読んだのだろうか。「文明批評家としての文学者」の中で樗牛は『……彼れが二三の著書を読み……』^①といているが、その著作とは何なのだろうか。残念ながら樗牛の蔵書の約半分は散逸してしまっていて、残された蔵書の中にニーチェのものはない。今は樗牛の残した言葉の中にその手掛りを求めるしかない。まず「文明批評家としての文学者」の中の『……博士ストラウスの如きは是の如き偽学者の好摸本として標榜せられたりき。』^②という言葉から、読んだという二、三の著書のひとつは「反時代的考察」であることは間違いないだろう。更に三十四年十一月の断片「偉人と凡人との別」の中の『哲人言あり、曰く、基督教徒は世に唯一人ありき、而して彼れは十字架の上に死したりきと。』^③という言葉から、どうやら「アンチクリスト」を読んだと思われる。そして「三十四年の文芸界」の中の『見るべき論文』で登張竹風の『ニイチェ論』について言及しており、また竹風とは友人関係であったことなどから、「道德の系譜」や「善悪の彼岸」は知っていたと思われるし、恐らく読んだと推測できる。だが樗牛のニーチェ理解は、ニーチェのショーペンハウエルとヴァーグナーに対する肯定的評価の側面のみである。従って「反時代的考察」も第四篇「バイロイトにおけるリヒャルト・ヴァーグナー」は読んでいないようである。——ただし樗牛はショーペンハウエルの欠点を、早々と指摘している。樗牛は「時勢及思索」（二十八年六月—八月）で『ショペンハウエルの根本的欠点は……即ち氏が人心の本然に根帯せる理想の存在を認めず、又心性本然の性質として此理想に向て精進するの自己活動は人生幸福の唯一の源泉なることを遺却したるにあり。』^④と述べている。——また「文明批評家としての文学者」の中で『……ルソー、ゲーテ、ショペンハウエル、ワグネル等の人物を挙げて真正なる文明の指針是に在りとなし、所謂超人は学者に非ず、実にはれ一個の芸術家、創作家なりと断じぬ。』^⑤と述べているのだが、これをどう解したらよいのだろうか。話の内容としては「反時代的考察」に符合しているように思われるのだが、超人（Übermensch）という言葉を使っている

ことがひっかかる。Übermensch という言葉がニーチェの著作中に出てくるのは、「ツァラトゥストラ」以前の著作では殆どないはずである。わずかな一例として「曙光」における「超人的熱情への信仰が持つ価値」について述べると、この「超人的」とは、禁欲的な、そして弱者の作りだした偶像的存在のことであり、ツァラトゥストラの超人とは似ても似つかぬ者のことである。ということは、樗牛は、ツァラトゥストラの序文か、第一巻でも読んだのだろうか。樗牛が前もって超人という言葉を知っていたということは、充分考えられるし、寧ろ知らない方が不自然である。何故なら、ケーベルや井上哲次郎の口からニーチェの話しを聞いているのだから。それに親友姉崎嘲風の書簡にもニーチェの話しはよく出てくる。従ってこの樗牛の「超人」の記述は、樗牛が自分の判断で捕捉的に入れたのか、或はツァラトゥストラの序文か何かを読んだかの、どちらかであろう。その判断は、はっきりとはつかないが、三十四年十月に樗牛がニーチェ批難者に対して書いた「漫評」の中で『馬骨先生はニイチェの何書を読まれたのか『イエーザイツ……』か、『フェルツング……』か、『ザラストラ』か、是の中一巻でも慥に読み得たと吾人に誓ふことの出来るか、如何か。……』^⑥などと述べている。このように相手を問い詰めている以上、樗牛自身は読んでいると解釈していいのかも知れない。ただ一月の時点で読んでいたかどうかは分らないが。それにショーペンハウエルやヴァーグナーを超人と結びつけている部分などは、どうみても樗牛の創作であろう。何故なら、ニーチェ自身その著作の中で彼らと超人をはっきりと結びつけたりはしていないからである。寧ろニーチェの著作全体を見渡すなら、ショーペンハウエルやヴァーグナーは、ニーチェのいう超人とイコールの存在と判断すべきではないし、しばしばその反対概念——例えば「ヴァーグナーの場合」など——の如くに描かれているからである。こうみてくると「文明批評家としての文学者」を発表した時点で樗牛が読んでいたニーチェの著作は、「反時代的考察」、そして可能性としては「ツァラトゥストラ」を読んだかも知れない、という所だろう。その後一年余りのいわ

ゆる「ニーチェ主義」時代に「アンチクリスト」「善悪の彼岸」「道徳の系譜」等、幾冊か読んだのは間違いないだろう。『道徳的並に知識的の生活は其の本来の性質に於て既に相對の価値を有するに過ぎず……』^⑧『等しき者のみ等しき者を解し得べし。』^⑨『強者と天才とは常に道徳を超越す。彼等より見れば仁義は弱者の武器に過ぎざるのみ。』^⑩『人生畢竟価値に外ならざる……』^⑪等の樗牛の著作中の言葉から、それは推測できると思う。以上樗牛が読んだと思われるニーチェの著作について考察してきた。次に樗牛の「ニーチェ主義時代」の代表的な著作といわれている「美的生活を論ず」について一言したいと思う。

2. 「美的生活を論ず」について

昔も今も「美的生活」は、樗牛のニーチェ主義時代の代表作であるという評価が一般的である。「美的生活」をニーチェ主義を代表する著作とみる評価は、樗牛の友人登張竹風の発言（明治三十四年九月の「帝国文学」誌に登張竹風によって『高山君の「美的生活論」は明かに、ニイチェの説にその根柢を有す』という一文がのった。）に端を発し、現在に到るまで、その評価は余り変っていない。しかし「美的生活」は果して樗牛のニーチェ主義を色濃く表したものだらうか。樗牛自身は巷の評価に対して「美的生活論は予が一家言のみ、一毫一銖もニイチェに待つ所無し。恐らくはニイチェを嘆美することに於て予は今の何人にも譲らざるものならむ。唯彼れは彼れたり、予は予たり。」^⑫（三十五年五月「無題録」）と述べている。「美的生活」に対する評価は、「ニーチェの反俗主義と本能満足主義を高唱しながら幸福とは何かを提示したものである。」（「日蓮と近代文学者たち」石川康明著 ピタカ）というのが一般的のようである。そして樗牛は「ニーチェを社会・国家・学術を否定し『最も純粹なる個人主義の本色を発揮した存在』とみなした。」（同上）ということになる。そしてこの土台の上立って「美的生活」論が展開されるということなのだが、果してそうだ

ろうか。確かに「美的生活」を読むと、反俗主義と本能満足主義を高唱しながら、そして道徳批判をしながら、幸福とは何かを提示しているように見える。樗牛は「美的生活」の中で『道徳と知識とは自らは独立の価値を有せず、その用は本能の発動を調節し、その満足の持続を助成する所に存す』^⑩などと言っている。だがその反面、道徳的に生きることに幸福を感じているなら、金を貯めることに幸福を感じているなら、それも美的生活だ、と言っている。樗牛の「美的生活」とは、決して性的なものだけではなく、人間の生本能にかなった——即ち、その人が幸福である——生き方のことである。したがって、個々人により、色々な生き方が生ずる。要はその人がそれで幸福であるか否か、なのである。『人性本然の要求の満足せられたところ、其処には乞食の生活にも帝王の羨むべき楽地ありて存する也。』^⑪と「美的生活」で語っている。幸福とは本能の満足であり、本能とは人性本然の要求だという。その要求を満足せしむるもの、これが美的生活だという。要はその人が幸福であれば「美的生活」なのである。「美的生活」は、『然れども貧しき者よ、憂ふる勿れ。望を失へるものよ、悲む勿れ。王国は常に爾の胸に在り。而して爾をして是の福音を解せしむるものは、美的生活は是れ也。』^⑫という言葉で結ばれる。たとえ通俗的価値観からはじき出された生き方でも、幸福ならば、人性本然の要求を満足せしむる生き方、即ち美的生活である、ということである。また逆に通俗的価値観のただ中にあっても、それを絶対の価値ありとし、それを人生究竟の目的とするならば、それは美的なのである。要するに相対的な価値ではなく、価値の絶対なるものが美的なのである。

樗牛の現世肯定的個人主義は、ニーチェ主義時代に微妙に変化しているように思われる。それ以前は本質的な（すなわち人間の存在そのものを考える）個人主義に視点を置きながらも、個別的個人主義の立場をかなり重んじているように見える。源氏物語に対する自らの評価にこだわる所などは、その好例であろう。だがニーチェ主義時代になると本質的個人主義に重きを置くことが主になってくるように思われる。「文明批評家としての

文学者」の中で『嗚呼ニーチェは一詩人のみ。而して独逸の思想界は現に彼れが為に動かされつつある也。寧ろ突梯とも見らるべき彼れの個人主義が爾かく一国文明の大動力となれるを見ては、吾人は切に文学芸術の勢力、実に科学哲学に幾倍するものあるを思ひ、更には是の点に於てうたた文学者の崇高偉大なる天職を覚悟せずむはあらざる也。』⁹と樗牛は述べている。樗牛はニーチェの個人主義が一国の文明を動かしているのをみた。そして文学者の崇高偉大なる天職を自覚した姿を目の当りにして、強い衝撃を受けたのではあるまいか。その自覚がニーチェにはあるからこそ『己れの信ずる所を貫徹せむが為には即ち一世を敵として戦ふを辞せざるの気魄』も持てるのである。樗牛もその自覚を持とうとしたらうことは、充分考えられる。だが「美的生活を論ず」では、そこまでの覚悟は前面に出てこないように思われる。ニーチェ的思考は確かに道徳論などに見え隠れしているものの、依然として個別的個人主義にこだわっているのである。従って「美的生活を論ず」は、ニーチェ主義時代の代表作というよりは、それ以前の現世肯定的個別的個人主義の集大成的作品と捉えるべきではないだろうか。前出のショーペンハウエルの欠点を述べた文章の中に『氏が人心の本然に根帯せる理想の存在を認めず、又心性本然の性質として此理想に向て精進するの自己活動は人生幸福の唯一の源泉なること……』という部分がある。これはまさに、言葉は少し違うが、「美的生活」で言わんとしていることと同じではないだろうか。この文章を書いたのは、二十八年のことである。また「美的生活を論ず」は「文明批評家としての文学者」より七ヶ月も遅く発表されている。従って「美的生活」は樗牛のニーチェ主義時代の真ただ中における著作なのだから、私の指摘は見当違いではないか、との疑念は当然出てくるだろう。だが私は人の一生が、この時期は□□時代、その後いつまでが○○時代、というように、はっきりと区切られるものではないと思う。そして樗牛もそんなに単純にその人生の期間を区切られる人ではなかったと思う。事実、日蓮主義時代といわれている三十五年七月に親友姉崎嘲風に「……恐らく僕は尚ほニーチェの理想に

彷徨する者であらう。』^⑧と述べている位である。樗牛の内面では、様々な思いが錯綜していたのではないだろうか。二十八年に既に抱いていた思いが、三十四年の「美的生活を論ず」として花開いたとしても、不思議ではないと思うのである。

(ニーチェから日蓮へ)

所で、樗牛の個人主義はどのように変化したのだろうか。個別的個人主義に重きを置くことから本質的個人主義に重きを置くことへと変化したということは既に述べた。では実際に、どんな所にそれが現れてくるのだろうか。三十五年八月に書いた「感慨一束（姉崎嘲風に与ふる書）」の中に暗示的な言葉がある。『是れまで他人の意味を余りに多く知り過ぎたる吾れは却て吾れ自らの意味をば知らざりき。人生の第一歩たるべきこの自覚を離れて、良しや万巻の書を読み古今の知識を蒐めたりとて吾れに於て何の関はる所ぞや。吾れは自ら此の覚醒を貴しと叫びぬ。此の間の消息を今更君に語るの要はあらじ。吾等はただ此の自覚に本づきて吾等の世界を建設するの務ありと存じ候。』^⑨この言葉は樗牛がニーチェによって示された文学者の崇高偉大なる天職を、自らも自覚したことを告白している文章なのではないだろうか。前年の三月に健康の悪化によりドイツ留学を諦めた樗牛にとって、こうした自覚を持てることは、大きな励みになったことだろう。三十四～五年というのは樗牛にとって、病状が悪化し、体力が衰え、やがて死にまで到る時期である。しかし三十二年間に満たない樗牛の生涯の中で、この最期の二年間は、最も輝いた二年間でもあったのではないだろうか。そしてそれを支えたのが、文学者としてのこの自覚だったのではないだろうか。ニーチェによって与えられた自覚は、ニーチェにのめり込ませつつ、また違った方向へと樗牛を導いた。「美的生活を論ず」を発表した翌月、すなわち、三十四年九月に樗牛のもとへ一冊の本が送られてきた。それは田中智学の「宗門之維新」だった。過激な日蓮主義を唱え

る田中の「宗門之維新」は、日蓮宗ばかりでなく、多くの知名人に無視されていた。だが樗牛は違った。この書に激しく反応したのである。以前の樗牛は宗教に対して「宗教の要素は非現世的たるに存す。」^⑧（三十年九月）とか「宗教の主性は迷信なり。」^⑨（三十一年二月）などと言って、余り感心を示していなかった。三十二年七月の「腐敗せる宗教家」においても、当時の宗教家たちに対して『第二の親鸞何処に在る、第二の日蓮何処にある。』^⑩と言っているが、余り深くは追求していない。浄土真宗や日蓮宗を研究した様子もない。所が三十四年九月を境に樗牛は、急速に日蓮に傾斜して行くのである。これは単にそれまで日蓮をよく知らなかったから、というだけの理由ではないような気がする。崇高偉大なる天職を自覚するというのは、個別的個にとどまっていたのではできないことであろう。自分のためだけではない、他のためでもある「自分」という自負がなければ、このような自覚は生まれないのではないだろうか。そのような自負があればこそ、己の信念に殉ずることも可能になってくるのではあるまいか。樗牛はそのような自覚に裏打ちされた強い信念をまずニーチェにみた。そして更に強い信念を日蓮にみたのではあるまいか。そこに眼が向き、強く惹かれたのは、樗牛がニーチェによって与えられた自覚によって拓かれたからではなかったのか。或は、いい方をかえるなら、新しい境地が開けたからではなかったのか。はっきりとした理由は分らない。しかし樗牛は、せき立てられるように日蓮研究に没頭し始める。三十五年四月「日蓮上人とは如何なる人ぞ」で樗牛は『彼れ（日蓮）の追懐は力也、信念也。』^⑪と言う。そして日蓮には自らが、末法の世に出現する上行菩薩であるという一大自信があった、という。それは『釈尊の予言に対する絶対の信仰と妙経色読の行者としての一身の證悟とに本づく。』と続ける。そして同年六月の「日蓮上人と日本国」においては『日蓮の説を以て国家主義と呼ぶは可也、然れどもそは全く理想上の意味に解すべし。今日の所謂る国家主義とは相容れず。』^⑫『此世に於て最も大なるものは、必ずしも国家には非ざるぞかし。最も大なるものは法也、信仰也。而して法に事ふ

るの人も亦時としては国家よりも大いなることある也。是の如き人にありては、法によりて浄められたる国土に非ざれば真正の国家に非ざる也。日蓮は即ち是の如き人なりき。』^⑧と言っている。樗牛によれば日蓮は、自分が末法の世に出現した上行菩薩であるという大いなる自覚を持っていた。——数々の法難を乗り越えた日蓮には、そうした自覚があった。（「日蓮のこころ」今成元昭著 有斐閣新書 189 ページ）——そして日蓮にとって最も大なるものは法であり、信仰である。それらが正しく行われぬ国は、真正の国家ではない。日蓮はこのような人だった、と樗牛はいう。このような大いなる自覚に裏打ちされた強い信念を持っていたからこそ、日蓮は数々の法難にも耐え得たのである。そして樗牛は「日蓮と基督」（三十五年六月）で『彼れの偉大は独り基督のそれに較べ得べきのみ』^⑨と言う。キリストは己の信念に従って十字架にかけられた。日蓮はそれに匹敵するといっているのである。そして同年八月の「日蓮研究会を起すの義」で『日蓮は予の知る日本人中の最大の偉人也。』^⑩と樗牛はいう。少しさかのぼるが、同年一月の「鎌倉の話」では、『秀吉、家康、乃至頼朝、尊氏等も、上人に比すれば其人物遙に小也。』^⑪とも言っている。これ程崇拜（とっていいと思う）して止まない日蓮を、何故これ迄見過ごしていたのだろうか。私見としては、樗牛に前述の自覚がなかったから見えなかった、と思うのだが、少し長いが樗牛自身の言葉を引用してみたい。「六七年前のことなりき、予は或処に於て偶々日蓮の文章と称する者を見たる事あり。当時の予は日蓮に就いて何等特殊の感興を有せざりしが、其の文章の一節がいたく予の好奇心を動かしたるは忘れもせざる事実なりき。然れども予は未だ仏教の教理に通ぜず、日蓮の教判等に就いて何等会得する所無かりしは言ふまでもなし。所謂予の好奇心を動かしたる一節は、単に其文字の雄壯にして語調の豪快なる、太だ平生見る所の国学者の文章に異なるものありしが為のみ。後來度々是の事を追懐せしことあれども、間もなく是の一節の文字すらも遺却し去りたりき。然れども何時かは日蓮上人の文章を研究するの機会に遭遇せむことは、是より永く予の希望の一つと

なりたりき。……中略……去年の秋の初なりき、予は田中智学氏より『宗門之維新』と題する一冊の寄贈を受けぬ。是の書は予が其後本誌上に紹介せしが如く、祖師上人の垂示せる大理想に本づきて今日蓮宗を改革し、以て世界を統一する一大宗教となさむとする著者の抱負と計画とを述べたるもの也。予は是の書を読み、著者が熱烈なる精神の上に及ぼせる日蓮上人の勢力を想ひて、深く心に感ずるところあり、更に上人の文章を研究せむと欲せし往年の志願を憶ひ起し、この一念の発起に乗じて是の偉人の組織的研究を思ひ立ちぬ。」^⑩（三十五年五月）と述懐している。そしてその好奇心を動かされた文章とは「教行證抄」中の『日蓮が弟子等は臆病にては協ふべからず。彼れへの経々と、法華経と勝劣、浅深、成仏、不成仏を判ぜむ時、爾前迹門の釈尊たりとも物の数ならず。いかに況むや夫れ以下の等覚の菩薩をや、況して権宗の者共をや』だったという。当時は日蓮に特別の興味がなく、雑事に追われて失念していたということらしい。だがそれは、当時の樗牛に反応する準備ができていなかった、ということだろう。三十四年九月、既にニーチェに触れていたから、もっと具体的にいえば、ニーチェによって、あの自覚を持たされていたからこそ、田中智学の本に反応したのだと私は思う。そしてその自覚を持つ下地となったものの一つは、樗牛の健康状態であったのではなからうか。留学を諦めなければならぬ程悪化した健康状態は、その後良くなる所か、更に悪化した。当然樗牛には、死を想う機会もふえただろう。そんな時、自分自身の存在の意味を見つめることができたなら、この上ない励みになることだろう。自分のためだけではない、普遍性を持った意味を見つめることができたなら。そしてそれを見つけた時、病気に対しても死に対しても見方が変わってくる。三十五年三月に書いた「病気の福音」で樗牛は、次のように述べている。『病気は吾々の身を弱くするが、其の代りに吾々の精神の上にさまへの貴むべき影響を与ふるものだ。濁れる心情を清め、浅墓な思想を深くし、動き騒げる胸を静かにし、忙がはしき此の日常の風俗生活の中にて吾々の想ひも寄らざる幾多の精神上の経験を与へ、且つ吾々の心霊の上に

最も厳肅なる平和と光明ある希望とを与ふるものは実に此の病気の力である。此の病中の趣味はとても健康な人の窺知を許さざる所謂現身證悟の三昧であるのだ。……仏家では昔より病時を以て発菩提心の好因縁となし聞法省察の無上の機会として取扱って居る……病気は身軀の方から観れば『死』の攻撃である。あゝ『死』！ 此の世の中で此れ程忌み嫌はれて居るものは無いが、さりとは浅はかな人心ではあるまいか。あゝ是の一の『死』を除いたならば何処に宗教があるであらうか、何処に哲学があるであらうか、また何処に詩歌芸術があるであらうか。人生のあらゆる幽妙高遠なるものは実に此の『死』に対するの安心、希望、解釈、装飾の為に作られたるものではあるまいか。……病気の福音は即ち死の福音であるのだ！……】^⑧ こんな言葉は、小心翼翼として死を恐れる者の口からは出てこないだろう。この時の樗牛は、あらゆるものに意味を見い出せる心境になっていたのだろう。文学者の崇高偉大なる天職を自ら自覚したからこそ、そうした自負を持ち得たからこそ、このような心境に樗牛はなれたのではないだろうか。病気も、そして死さえも日蓮の身にふりかかった数々の法難——日蓮は身にふりかかる数々の法難を「法華経」の行者としての証しとして喜んだという（前出「日蓮のこころ」）——と同じように樗牛には思えたのかも知れない。

ニーチェから日蓮へ、樗牛においてそれを可能にしたのは、個別的個を脱した、文学者としての崇高偉大なる天職の自覚だったのではないだろうか。その自覚をうながしたのはニーチェだったのではないだろうか。樗牛のニーチェ理解は、現代から観れば浅いものであったかも知れない。超人に対する考察なども、単純過ぎるように見える。樗牛は言っている。「人はニーチェを言ふ、唯願くは吾をして永く吾たらしめよ。ニーチェは天才、望むべくして即くべからず、千歳に独歩せしめて可也。」^⑨（三十四年十月）だが何よりも一個の人間として樗牛がニーチェから得たものは大きかったと思う。その最大のものが、あの文学者としての自覚だったと思う。そしてそれが日蓮へと導いたと私は思うのである。そして、樗牛、

ニーチェ、日蓮には、「先天の契合」ともいうべき共通項があった。それは「現世肯定」ということである。死の一月前、樗牛は次のような文章を書いた。「大いなる人となるの道は唯二つあるのみである。己れの小さきを悟るは其の一つである。己れの大きいなるを信ずるは他の一つである。前者は情により、後者は意による。彼れは攝受門、此れは折伏門。彼れは易行道、是れは難行道である。彼れは釈迦基督の教義にして、此れは奈破翁、ニイチェの信條である。」⁹樗牛も大いなる人となる道を歩みつつあったに違いない。ではどちらの道を歩んだのだろうか。己の小さきを悟る道だったのか、或は己の大きいなるを信ずる道だったのか。その答は、無自覚の私には分らない。尚多くの時間を費して日蓮を研究するという課題が残った次第である。

〈注〉

1. 「樗牛全集第二巻」 明治三十八年 博文館 823 ページ 以下巻数とページ数のみ表記
2. 二巻 824 ページ
3. 四巻 1008 ページ
4. 四巻 146 ページ
5. 二巻 825 ページ
6. 三巻 729 ページ
7. 四巻 862 ページ
8. 四巻 976 ページ
9. 四巻 999 ページ
10. 四巻 1084 ページ
11. 三巻 735 ページ
12. 四巻 859 ページ
13. 四巻 869 ページ
14. 四巻 870 ページ
15. 二巻 843 ページ
16. 五巻 458 ページ
17. 四巻 965 ページ
18. 二巻 490 ページ

ニーチェから日蓮へ〈樗牛の場合〉

19. 四巻 703 ページ
20. 四巻 799 ページ
21. 四巻 888 ページ
22. 四巻 915 ページ
23. 四巻 916 ページ
24. 四巻 937 ページ
25. 四巻 960 ページ
26. 五巻 257 ページ
27. 四巻 1060～1062 ページ
28. 四巻 1032～1033 ページ
29. 四巻 995 ページ
30. 二巻 974 ページ

〈参考文献〉

- 「ニーチェ全集」 第Ⅰ期 第Ⅱ期 白水社
- 「ニーチェ辞典」 弘文堂
- 「日蓮と法華経」 講座日蓮1 春秋社
- 「日蓮のこころ」 今成元昭著 有斐閣新書
- 「日蓮と近代文学者たち」 石川康明著 ピタカ